論　文

文献史料から見た砕葉城

齊　藤　茂　雄※

※　帝京大学文化財研究所

はじめに
Ⅰ．唐進出以前の砕葉
Ⅱ．唐・西突厥・吐蕃抗争期の砕葉
Ⅲ．裴行倹の阿史那都支討伐と王方翼の築城
Ⅳ．唐による砕葉運営
Ⅴ．唐放棄後の砕葉
おわりに

はじめに

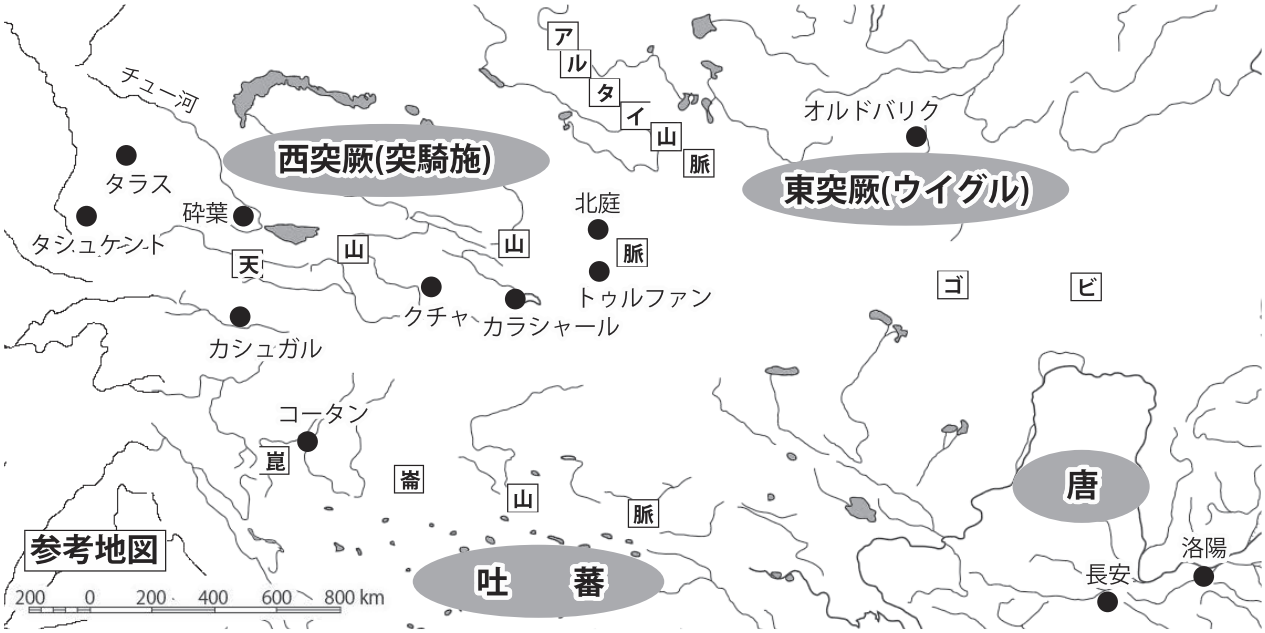
アクベシム遺跡周辺は、唐代中国からは「砕葉」と呼ばれていた。これは、チュー河を意味するスイアブ Sūyāb の漢字音写であるとされていて、素葉・睢合・雖合などと音写されることもある。[1)]

この砕葉についての文献記述は、そのほとんどを漢文史料に拠らなければならず、そのうえ、量・質ともに十分とは言いがたい。考古学的な研究成果は、筆者のような文献史料を用いる者にとっても、鶴首して待つべきものなのである。

とはいえ、考古学的研究だけでは当時の砕葉周辺の政治や社会状況は明らかにしがたい。筆者は、前稿[2)]でタリム盆地周辺を含む砕葉の歴史を概説したが、それゆえに都市としての「砕葉城」の歴史からピントが外れてしまった面は否めない。そこで、本稿では、できるだけ砕葉城に関わる史料だけを零細な記述ではあれ翻訳し、文献史料上明らかにできる範囲までを明示していく。そうして、砕葉城の歴史展開を明確にしていくことが、少しでもアクベシム遺跡研究の助けになれば幸いである。

Ⅰ．唐進出以前の砕葉

漢籍史料中において、唐進出以前の砕葉について記録している史料は少ない。その数少ない貴重な史料が、インドへ向かう求法の旅の途中、630（貞観四）年に当地を訪れた［de la Vaissière 2010, p. 166］玄奘の記録である。



文献史料から見た砕葉城

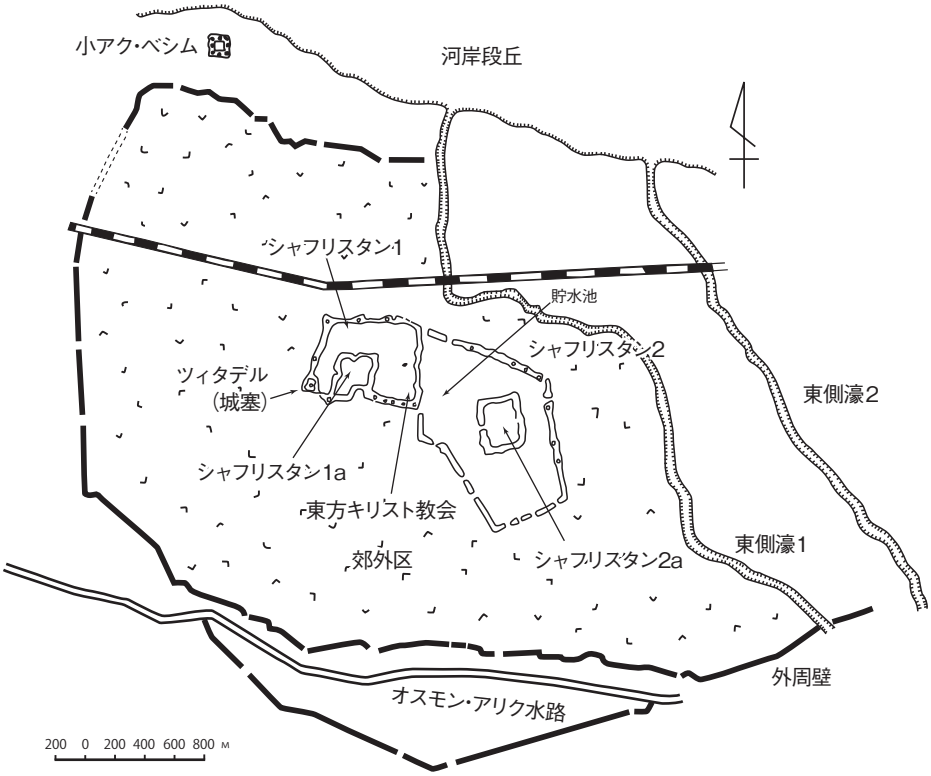
『大唐西域記』巻一（p. 18）
清池西北行五百餘里、至素葉水城。城周六七里、諸國商胡雜居也。土宜糜・麦・蒲萄。林樹稀疎。気序風寒、人衣氈褐。素葉已西數十孤城、城皆立長。雖不相禀命、然皆役屬突厥。
【和訳】清池（イシク・クル）の西北に500里あまり（約220㎞）で素葉水（スイアブ）の都市に到着する。城壁の周囲は6・7里（約2.5～3㎞）であり、諸国のソグド商人が雑居している。土地はキビ・ムギ・ブドウに適している。木々は少ない。（その）気候は風が冷たく寒いので、人々はフェルトの服を着ている。素葉以西にある数十の独立した都市は、皆（各々の）君長を立てている。命令を受けているわけではないが、（西）突厥に隷属している。

この記録では素葉とあるが、上述したようにやはりSūyābの音写であり、問題はない。この記述には、都市の大きさについて記述があり興味深い。実際のアクベシム遺跡の城郭と比較すると、第1シャフリスタンは、城壁の長さがそれぞれ北壁657m、東壁514m、南壁859m、西壁429mで、全周が2,459mであり［望月他2020, p. 71］、玄奘の報告とおおよそ一致する。一方、第2シャフリスタンの城壁は、長さがそれぞれ北東壁735m、南壁490m、南西壁744 m、北西壁707mで、全周3,490mになり［望月他2020, p. 71］、こちらは玄奘の報告よりもやや長い。後述するように、第2シャフリスタンは玄奘の来訪よりも後に造られたと考えられるため、玄奘が報告しているのは第1シャフリスタンのことであろう。玄奘の報告の正確さに驚かされる。その城内には各地域の商人が拠点を作り、周辺の都市も含めて西突厥に隷属していたという。

ここでは、遊牧民とオアシス都市民の共生関係が如実に表れている。騎馬軍事力は持っているが経済的には不安定な遊牧民と、交易により経済力は持っているが軍事力は持っていないオアシス都市民は、交易の利益と軍事力による庇護をバーターに、一般的に結合しやすい[3]。碎葉城に住むオアシス都市民は、トルコ系遊牧民の西突厥から庇護を受ける存在だった。

では、碎葉の都市民と遊牧民とは、どのような距離感で生活を行っていたのだろうか。唐代後半期に編纂された『皇華四達記』は以下のように記す。

『新唐書』巻四三下「地理志七下 羈縻州 引賈耽『皇華四達記』」（pp. 1149-1150）



アク・ベシム遺跡全体図および呼称名［帝文研2020,p.4,Fig.1.4］

傍碎卜水五十里至熱海。又四十里至凍城、又百一十里至賀獵城、又三十里至葉支城、出谷至碎葉川口、八十里至裴羅將軍城。又西二十里至碎葉城、城北有碎葉水、水北四十里有羯丹山、十姓可汗每立君長於此。自碎葉西十里至米國城、又三十里至新城、又六十里至頓建城、又五十里至阿史不來城、又七十里至俱蘭城、又十里至税建城、又五十里至怛羅斯城。

【和訳】碎卜水に沿って五十里で熱海（＝イシククル）に着く。さらに四十里で凍城に着き、さらに百一十里で賀猟城に着き、さらに三十里で葉支城に着き、谷を出て碎葉川（＝チュー平野）のとば口に着き、八十里で裴羅將軍城に着く。さらに西方に二十里で碎葉城に着くが、城郭の北方に碎葉水（＝チュー河）があり、河の北方四十里には羯丹山があって、十姓可汗（西突厥／突騎施（テュルギシュ））はいつも君長をこの場所に立てる。碎葉から西方に十里で米国城[4]に着き、さらに三十里で新城（＝クラスナヤレチカ［内藤 1988, p. 15］）に着き、さらに六十里で頓建城に着き、さらに五十里で阿史不來城に着き、さらに七十里で俱蘭 (クーラーン) 城に着き、さらに十里で税建城に着き、さらに五十里で怛羅斯（タラス）城に着く。

不明の地名が多いものの、要所となる地名は判明しているので大まかには理解ができる。まず、熱海とされるイシククルからチュー河に沿って北に山を越え、現在のビシュケクなどがあるチュー平野に出てから、さらに河沿いに西に向かったところに碎葉城がある。原文では「碎葉川」、「碎葉水」という使い分けがされているが、碎葉水がチュー河そのものの意味である一方、「川」は河川の意味ではなく「河川の周囲にある平原」の意味である。つまり、このチュー川沿いの平原が「碎葉川」であり、その中央には「碎葉水」ことチュー川が流れていた。そして、そこの中心都市として「碎葉城」がある、という関係になる。

不明な地名が多いにもかかわらず、ここで延々と史料を引用したのは、チュー河沿いにはそれだけ都市が多かったことを示すためである。遺跡として現存するものとしてアクベシムを含め 10 程度が知られている[5]が、当時も同等の都市が存在していた事になる。

そして、肝心の遊牧民と碎葉城の関係についてもこの史料には記述があり、多くの都市があった中で碎葉城の北方のチューイリ Chu-Ili 山脈に、「十姓」と呼ばれる西突厥とその後裔である突騎施との中心地があった。アクベシム周辺は、標高差を利用して高地には遊牧民、低地には農耕民が暮らすという住み分けがされていたものと思われる[6]。高地から見下ろす形で遊牧民がチュー河沿いの都市の安全を見守りつつ、都市からは交易の利益の一部を徴収していたと考えられる。

さて、かの玄奘の記録以前に碎葉の姿を伝える史料は見当たらないが、それも当然であろう。なぜなら、考古学的な調査結果からは、碎葉城がソグド人によって最初に建設されたのは、5 世紀頃と指摘されているからである［ケンジュアフメト 2009, p. 224］。

とはいえ、この見解は文献史料の記述と比較すると新たな疑問を生むこととなる。というのも、敦煌から発見されたソグド語の『古代書簡』によれば、4 世紀初頭にはソグド人は酒泉や姑蔵などの河西回廊に進出し、そこを足がかりに中国まで交易網を広げ始めていた［吉田／荒川 2009］からである。なぜ中国よりはるかにソグド本国に近い碎葉の方が、後からソグド人が進出したのだろうか。

この疑問に対して、東西文献史料に考古学的な調査結果も加え、総合的なソグド史の復元を行ったフランスのヴェシエール［2019, pp. 86-98］は、5 世紀から 6 世紀にソグディアナでは農業が飛躍的に発展して人口が増加し、碎葉を含む北方のセミレチエの草原までも、ソグド人が移住を開始したことを指摘する。彼によれば、セミレチエの都市の立地は農業に都合の良い場所に限られており、最初から商業活動を前提とした都市の建設ではなく、農耕を基礎とした入植拠点なのだという。先に挙げた『皇華四達記』の中に登場する多くの河沿いの都市は、これらソグド入植者が建設した都市なのであろう。つまりは、河西回廊や中国への進出は交易拠点の確保に留まるが、碎葉への進出は農業を基盤とし、都市建設を伴った入植であると考えるべきなのである。

とはいえ、巨視的に見れば碎葉城の立地は農耕だけではなく交易にも向いていた。松田［1970, pp. 430-431］や内藤［1988, pp. 37-38］は、西方のマーワラーアンナフルのオアシス商業圏と北方のアルタイ・モンゴリアの遊牧圏、そして東方の中国に対する交渉地点として碎葉を捉えている。要は、中央アジアと北アジア、そして東アジアの結節点に碎葉は位置しており、その立地のゆえに様々な地域の物産

が集積する地域だったと考えられる。その立地が砕葉城を国際的な商業都市として発展させたと考えられるのである。

こうして、砕葉城は農業を基盤とする交易都市として、遊牧民とも提携しつつ発展を遂げることとなったのである。

Ⅱ．唐・西突厥・吐蕃抗争期の砕葉[7)]

618（武徳元）年に唐が建国されると、中央ユーラシア勢力も糾合して支配領域を瞬く間に拡大していった。やがて、タリム盆地へも唐が進出してくることとなる。630（貞観四）年にハミ（伊吾）オアシスを支配下に置いた唐朝は、着々と各オアシスを支配下におさめ、648（貞観二十二）年には、クチャ（亀茲）オアシスに安西都護府を移設して、同時に安西四鎮を置いた。この時の安西四鎮には、クチャ・カシュガル（疏勒）・コータン（于闐）が含まれるが、もうひとつを砕葉とする史料と、カラシャール（焉耆）とする史料があり、明らかではない。内藤［1988, pp. 21-29］は、唐は642年頃から乙毗射匱可汗や阿史那賀魯といった西突厥の有力者を支配下に置いていたため、砕葉まで勢力圏に入っていた可能性を指摘する。

とはいえ、この段階では、唐の支配がどれほど砕葉に及んでいたかは不明である。649（貞観二十三）年に、太宗死後の代替わりの隙を突いて、唐に反旗を翻した阿史那賀魯の反乱が657（顕慶二）年に鎮圧された後、唐は旧西突厥[8)]王族の阿史那歩真と阿史那弥射に西突厥を東西に分割統治させる。そのうち、西半を統治した継往絶可汗・濛池都護の阿史那歩真の統治拠点である濛池都護府が、砕葉城に置かれたとされている［内藤 1988, p. 44］。しかし、662（龍朔二）年と666～667（乾封年間）年に唐が任命した両可汗が相次いで殺害され、唐の西突厥支配は失敗する。内藤［1997, p. 155］も666～667年段階で砕葉鎮は廃止され、焉耆鎮に交代したと見なしている。

670年代になると、唐とならんでチベット高原の吐蕃がタリム盆地に進出してくる。670（咸亨元）年と677（儀鳳二）年の二度にわたって、旧西突厥勢力とも連携して唐の安西四鎮を陥落させている。この時期には、再び砕葉は旧西突厥の勢力圏に入ったようである。

こうして、西域の勢力争いが目まぐるしく展開していく最中、砕葉では王方翼による新城の建設を見ることとなる。

Ⅲ．裴行倹の阿史那都支討伐と王方翼の築城

先に述べたように、670年代の砕葉周辺は、吐蕃と連携した旧西突厥の勢力下にあったが、それが十姓可汗を自称していた阿史那都支である。

阿史那都支は、もともと670（咸亨元）年に唐から匐延都督に任じられ、西突厥東半の統治を任せられていたが、677（儀鳳二）年に反旗を翻した［内藤 1988, p. 65］。その背景には、吐蕃との連携があり［森安 2015, p. 148］、唐の西域支配は崩壊の危機を迎えていた。

そこに奇策を打ち出したのが裴行倹である。彼は、679（調露元）年に、ササン朝ペルシャより逃れた王が長安で亡くなったことを利用して、人質としていた王子を帰国させ、新王に冊立するとして長安を出発した。彼は途上で安西四鎮の現地兵と見られる「蕃酋子弟」を召集し、西州（トゥルファン）で府兵の徴発も行いつつ［劉子凡 2016, p. 186］、使者として通過するという名目で都支の住地に近づくと、油断していた都支を奇襲し捕らえたのである。裴行倹はそのまま砕葉城に入り、都市内に紀功碑を建てて帰還した。肝心のササン朝王子は、用済みとばかりに砕葉以降自力での帰還を強要され、案の定帰国がかなわず吐火羅に亡命して亡くなったという。[9)]

この時裴行倹によって建てられた碑文ではないかと言われているのが、[10)]アクベシム遺跡から見つかった漢文碑文である。[11)]幸いにも、加藤［1997, p. 190］で福永光司氏が書き下しを行い、Лубо-Лесниченко［pp. 119-121］・肯加哈買提［2017, pp. 189-196］が訳注を付けているため、それを参考にして和訳してみたい。

1. ］□布微澤無涯、而□□［
2. ］□前庭與後庭伊蕞尓之□[12)]。［
3. ］□物以成勞、乃西顧而授鉞［
4. ］□逐別蹛林而已。遠望陰山［
5. ］祭[13)]天之舊物、覧瑤池之仙圖［
6. ］三[14)]邊、我指期於□□□□皇［

【和訳】

1. ・・・微少な恩沢を限りない範囲にまで広め、・・・

2. ・・・（車師国の）前庭と後庭（に例えられる西域？）は小さな［境域？］である。
3. ・・・物を・・・し、そして功績をあげ、それから西方を見て兵権を授けた。
4. ・・・追って（？）（匈奴における秋の大会の地である）蹛林から別れたのである。遠く（遊牧適地である）陰山をながめ、・・・
5. ・・・（匈奴が）天を祭っていた遺物を・・・し、（西王母が住んでいた西方崑崙にある）瑶池の仙人の図讖を見た。・・・
6. ・・・東・西・北の辺境を・・・し、私は・・・を期限を切って、・・・

断片であるため、ほとんど意味を取ることができないが、少なくとも中国辺境もしくは中国国外を指す表現が羅列されていることが分かる。その指す範囲は匈奴や車師、陰山や崑崙など、中国から見て北方・西方の部族・地名が現れており、いわゆる中国の「西北辺」を想起させる文章である。それゆえ、砕葉城という「西方辺境」に漢人が遣すにふさわしい内容といえる。ただし、ここで注意しておきたいのは、このような雅文においては、これらひとつひとつの部族や地名は、あくまで「西北辺というイメージ」を想起させるための道具であって、実在の部族や地名と具体的に対応することは多くないということである。たとえば、本碑を762（宝応元）年以後のものとする肯加哈買提［2017, pp. 196-197］が年代比定の前提としたような、「前庭」が具体的に「西州前庭県」のことを指している、ということは、絶対にないとは言い切れないが一般的ではない。前後の文脈が分からないので断定的なことは言えないが、「前庭・後庭＝車師」という漢代の故事を踏まえた典拠から、「西域」を連想させる用語として「前庭」が持ち出されているに過ぎないと考える方が、石刻史料の読み方としては自然である。具体的な文脈が把握できない以上、憶測で考察を進めるべきではない。それゆえ、この碑文断片だけでは、「西北辺に関わる碑文」ということ以上のこと、すなわち、裴行俭と関わるかどうかは現時点では明らかにできない、ということをここで明言しておく。

さて、話を裴行俭の遠征に戻そう。裴行俭の遠征には、王方翼が副使として同道していた。阿史那都支を捕らえて砕葉城に入城したときに、王方翼が主導して砕葉城を建てたのだという。史料には次のようにある。

『旧唐書』巻一八五上「良吏伝上 王方翼」（p. 4802）
又築<u>碎葉鎮城</u>。立四面十二門、皆屈曲作隠伏出没之状。五旬而畢。西域諸胡競來觀之、因獻方物。
【和訳】さらに（王方翼は）砕葉鎮の都市（の城壁）を建築した。（城壁の）4面に（全部で）12の門を立て、（それらの門は）すべて屈曲していて、（兵の）出撃や退却を隠す形となっていた。50日で（工事は）終わった。西域の外国人たちが競いやって来てこの都城を見て、土地の物を献上した。

この時に建てられたのが、アクベシム遺跡の中のどこかという議論は長らく続いているが、第2シャフリスタンとする説が有力である。柿沼［2019, p. 51］が、先行研究をまとめたうえで、50日による築城が当時の人員・技術で可能であることや、考古学的な発掘成果から、第2シャフリスタン説を改めて補強している。

とはいえ、四面十二門、すなわち一面に三門あったはずの城壁や、門の形状など、実際のアクベシム遺跡とは齟齬が出る部分も多く、謎の多い文章となっているが、ここでは細かい考証を行うことは避け、ただ、築城が679年であったこと、築城までに50日が費やされたことだけを指摘するにとどめたい。[15] そして、この王方翼の築城により、再び砕葉鎮が安西四鎮に加えられることとなった。

また、この時の築城に関して、裴行俭・王方翼がササン朝王子を護送するという名目を立てて、阿史那都支をだまし討ちしなければならなかったことから考えて、唐が砕葉を完全に勢力下に置いた状態での築城ではなく、西突厥や吐蕃の隙を突いた電撃的な築城であったということは指摘できるだろう。それゆえ、50日という工事期間も決して余裕のあるものではなく、突貫工事で行われたのだろうと推測される。

Ⅳ．唐による砕葉運営

こうして、砕葉城には唐の支配拠点が作られることとなった。そもそも、唐の西域支配とは、旧来の統治機構であるオアシス国家を解体せず、国王を都督や刺史に任命して唐の官僚体制の中に位置付けた上で、唐の鎮守軍をも駐留させて統治を行うという、

二重支配体制であったことが指摘されている。[16)]

一方、砕葉城に関しては、柿沼［2019, pp. 49-50］が翻訳しているように、『宋高僧伝』の記述から、661（龍朔元）年以前に「砕葉国」が存在していたことが分かる。もし唐が他のオアシス都市に施したような二重支配体制を砕葉でも行っているとすれば、第２シャフリスタンを築城して乗り込んできた唐の軍団とは別に、砕葉の旧来の統治者、すなわち第１シャフリスタンに居を構えていたはずのソグド領主もそのまま王宮に住み続け、統治者としての立場を継続させていたと見られる。

実際に、砕葉城に州が置かれ、ソグド領主が刺史になっていたことが史料上確認できる。その史料とは、唐高宗の陵墓である乾陵に奉献された蕃臣像に附された人名であり、陳国燦［1980, pp. 195-196］の釈読によれば「砕葉州刺史安車鼻施」とある。この人物は、ソグド姓のひとつである安姓を名乗っていることから、ソグド人と見られる。上述したように、唐の西域政策とは、もともとの国王を都督や刺史に任命するものである。内藤［1988, pp. 45-46］によれば、安西四鎮のひとつであった砕葉都督府には、名目的である可能性はあるものの五州が置かれていたという。この「砕葉州刺史」がそのうちの一州であったと考えて問題なかろう。すなわち、この史料は砕葉国に砕葉州が置かれ、領主が刺史に任命されていたことを表すのである。[17)]

この時期の史料として名高いのが、アク・ベシム遺跡より出土した漢文の「杜懐宝碑」である。杜懐宝は安西副都護として砕葉城に赴任していたと思われる人物で、その赴任時期は679（調露元）年末ないし680（調露）年初頭から、686（垂拱二）年までで諸説一致する［内藤 1997, pp. 154, 157；周偉洲 2000, pp. 389-390；柿沼 2019］。本碑文もその間に作成されたと考えられる。筆者は、2022年５月にこの碑文を所蔵するビシュケクのスラブ大学展示室で、本碑文を実見調査することができた。[18)] 詳細は別稿に譲るが、実見調査の結果、これまでの録文を一部改めることができたため、録文と和訳のみここに提示する。[19)] 転写の字体はなるべく原文に近いものにしている。録文のうち、四角囲いの文字は残画から復元した文字を、□に（　）を付けている文字は、完全に破損しているが、意味から推測したものを示す。

【録文】

□（唐？）□（安）西副都／□（護）碎葉鎮壓／十姓使上柱國／杜懐□（寶）□上為／天皇□（天）后、下／為□□□妣／見存□（眷）属[20)]之／法界蒼生[21)]普／願平安獲其／暝福敬造一佛／□（二）菩薩

【和訳】

唐（？）の安西副都護・砕葉鎮圧十姓使・上柱国である杜懐寶は、上は天皇・天后両陛下のため、下は・・・・・亡母や存命中の家中の者、ならびにあらゆる人々のために、（生活が）平安であることや、彼らが冥福を得ることを広く願い、一仏二菩薩を作りたてまつります。

さて、こうして唐は砕葉の支配に乗り出したが、早くも吐蕃が686（垂拱二）年もしくは687（垂拱三）年に砕葉鎮を含む安西四鎮を陥落させた。残念ながら、吐蕃の経営がいかなるものだったのか、その時砕葉城に駐留していたはずの唐の軍団がどうなったのか、伝える史料はない。

吐蕃に対して、690（天授元）年に唐から代わった則天武后の武周は、692（長寿元）年に反撃を開始する。旧西突厥の一部族である突騎施（テュルギシュ）の首長・烏質勒と手を結び、同年に砕葉鎮を含む安西四鎮を奪還することに成功したのである。[22)] この時から、安西四鎮には３万人にも及ぶ漢兵が鎮守するようになったとされる［『旧唐書』巻一四八「西域伝 亀茲条」（p. 5304）］。

アク・ベシム遺跡からは、この頃のものと考えられている亀型の割符（亀符）が２点発見されている。柿沼［2020, pp. 141-142］は、これらの亀符を分析して以下のように述べている。亀符は武周期に属する690（天授元）年から705（神龍元）年に使われたものであり、アク・ベシム遺跡で発見されたのは随身亀符と呼ばれる一種の身分証である。１点目の亀符には「左豹韜衛翊府右郎將員外置石沙陁」とあって、石沙陁なる人物が帯びていたとみられる。柿沼は石沙陁について「アク・ベシムに駐在した異国人軍官」と述べる一方で、「タシケント出身のソグド系商人の有力者」ではないかと推測している。２点目の亀符には「左武威衛翊府中郎將員外置颯支達干」とあって、颯支達干という人物が帯びていたと見られる。柿沼はこの人物について、颯支は古代トルコ語の savčï[23)]（使者）、達干は古代トルコ語称号 tarqan の音訳であり、唐に与する西突厥王族の阿史那斛瑟羅か、台頭しつつある突騎施の烏質勒か、いずれか

のトルコ系遊牧勢力に属していたのではないかと推測している。蓋然性の高い推測であろう。この２点の亀符は、武周期の碎葉鎮において、様々な出自の人物が唐の官僚として出入りしていたことを示唆している。

その頃、碎葉城は西方の玄関口として機能を果たしたようだ。前嶋［1982, p. 62］が紹介する以下の記事について見てみよう。本記事は『資治通鑑』［巻二〇五（p. 6505）］が武周期の696（万歳通天元）年に紀年付けている。

『旧唐書』巻八九「姚璹伝」（p. 2903）
時有大石國使請獻獅子、璹上疏諫曰、「獅子猛獣、唯止食肉、遠從碎葉、以至神都、肉既難得、極爲勞費。･･･（後略）」疏奏、遽停來使。
【和訳】おりしも大石国（＝大食？）の使者が獅子を献上したいと請願してきたが、姚璹は上奏して次のように諫めた。「獅子は猛獣で、肉を食べるばかりで、遠く碎葉から神都（＝洛陽）までやって来るのであれば、肉は得がたいもので、多大な費用がかかります。･･･（後略）」上奏した後、すぐに使者の来訪を停止した。

「大石国」の場所は残念ながら分からない。しかし、『資治通鑑』はこれを「大食国」に書き改めている。大石と大食は発音が同じなので、本来は大食が正しいのかもしれないが、一方で碎葉の西南にはソグド諸国のひとつの石国（チャーチ／現タシュケント）があるので、そちらの意味なのかもしれない。いずれにせよ、西方からの使者が獅子を献上したいと武周に申し出たのであるが、それに対する姚璹の諫言は、「碎葉から洛陽までの間」、多大な費用がかかる、というものだった。

前嶋は、この記事を唐が690年代にも碎葉を保持していたことを示す証拠として取り上げたのだが、さらに議論を進めて、碎葉城が当時持っていた国際的機能という面から捉え直せば、この記事で碎葉が洛陽までの旅程の起点として記されているということが重要である。というのも、使者によって持ち込まれた獅子は、碎葉から洛陽まで唐がその食糧を負担する予定であったことをこの記事は示していて、使者は碎葉城で唐国内の通行許可証の発行を受けた可能性が高い。それはつまり、唐の支配領域として最西端にあった碎葉は、唐が外国使節と接触する玄関口であったことをこの記事は示していることになる。[24)]

上述した松田［1963, pp. 430-431］や内藤［1988, pp. 37-38］の見立ては、地理的に碎葉は中国と西方世界の結節点となる位置にあったという指摘であったが、唐の領域の西端であるという性格上、国際関係においても碎葉は結節点として働いていたのである。

この時期に、碎葉城には大雲寺と呼ばれる仏寺が建てられる。後述するように、751（天宝十）年に碎葉城を訪れた杜環という人物が大雲寺の存在を報告しているのである。大雲寺とは、690（載初元）年七月に則天武后が命令して全国各地に作らせた仏寺である［『旧唐書』巻六「則天武后本紀」（中華書局標点本, p. 120）］。大雲寺は、アク・ベシム遺跡の第２シャフリスタン内にある仏寺跡（第０仏教寺院）がそれに当たると指摘されており［城倉 2021, p. 25］、都市の中枢部に隣接することからその重要性がうかがえる。様々な出自の人物が出入りし、様々な国の使節が訪れる碎葉城においては、仏教は人々を結びつける重要な要素として働いたものと考えられるのである。

唐はさらに700（久視元）年に、旧西突厥王族の阿史那斛瑟羅を平西軍大総管として碎葉に鎮守させた。これは、西突厥と同様、碎葉周辺の山地で遊牧をしながら周辺を鎮守するという形を取っていたものと思われる。

しかし、唐が碎葉を明確に確保できていたのも、わずかな時間だった。703（長安三）年に、烏質勒が斛瑟羅を唐内地に追いやって碎葉を確保したのである。唐はこの後も碎葉鎮守使を置いているが、それは烏質勒との妥協の結果であって、実質的には唐の勢力圏とは言えないという［松田 1970, pp. 367-369］。とはいえ、唐が碎葉城に軍団を駐屯させていたのもまた確かである。

『資治通鑑』巻二〇九「中宗景龍三（709）年条『考異』所引『景龍文館記』」（p. 6632）
時碎葉鎮守使中郎周以悌率鎮兵數百人大破之、奪其所侵忠節及于闐部衆數萬口。
【和訳】おりしも碎葉鎮守使で中郎の周以悌が、鎮兵数百人を率いてこれ（烏質勒の子の娑葛）を破り、その侵攻してきた阿史那忠節とコータンの人々数万人を奪った。

この史料から、数百人単位であるかもしれないが、少なくとも唐兵が碎葉城にいたことが分かる。さらに、次の史料も同時期の唐兵の存在を示している。

蘇頲「命呂休璟等北伐制」（景龍四（710）年五月十五日）『唐大詔令集』巻一三〇（p. 705）[25]
北庭副都護郭虔瓘・安處哲等、懐才抱器、蓄鋭俟時、慣習軍容、備知邊要、並可爲副大總管、領瀚海・北庭・碎葉等漢兵及驍勇健兒五萬騎。
【和訳】北庭副都護の郭虔瓘・安処哲等は、徳行と才能を兼ね備え、鋭気を養って時機に備え、軍容に習熟し、辺境情勢に通じているので、それぞれ副大総管とし、瀚海・北庭・碎葉等の漢兵と驍勇健児五万騎を率いることを許可する。

この史料は、モンゴル高原を中心とする突厥第二可汗国（東突厥）のカプガン可汗黙啜に対して、北伐を行うために出された制勅である。その中で、北庭副都護が碎葉の兵を率いるよう命じられている[26]。少なくとも碎葉にはこの時に軍団が駐屯していて、戦時には徴集され得たのである。突騎施の勢力下に入ったとはいえ、唐も確かに軍団を置いていたのは間違いない。

突騎施の勢力下にありながら、唐の軍団も同時に駐屯しているというこの状況について、王小甫［1992, pp. 282-288］は、当時西域進出を狙っていた突厥第二可汗国の侵攻に対して、唐と突騎施の間の利害が一致した結果であると見なしている。すなわち、碎葉を名目的にとはいえ自分たちの領域におさめておきたい唐と、突厥第二可汗国の侵攻に対して兵力を増強したい突騎施が手を結び、碎葉は両属状態に入ったと見なすのである。この両属時期に当たる705（神龍元）年から719（開元七）年の間に利用されたと見なされ、朝貢使者が帯びていた「朝貢魚符」がアク・ベシム遺跡周辺から発見されており［柿沼 2020, pp. 138-139］、両属時期にも碎葉城で外国使節の受け入れが行われていた可能性がある。

このような両属状態が生じることは、タリム盆地のオアシス都市では他にも例がある。すなわち、およそ100年後の782（建中三）～790（貞元六）年頃に、東部天山地域の北庭・トゥルファンは唐とウイグル可汗国の両属状態にあった［Mackerras 1990, p. 328］ことである。実質的にはウイグルの勢力下に入っており、長安との連絡も途絶えがちであったにもかかわらず、唐が設置した節度使は存続し続けていた。そのほか、11世紀に契丹と北宋とに両属していた雄州の事例［洪性珉 2013］、12世紀にカラキタイと西カラハン朝に両属していた中央アジア勢力の事例［Biran 2005, pp. 125-126］など、両属状態は内陸アジアで多く見られる現象なのである。

Ⅴ．唐放棄後の碎葉

唐が碎葉から完全に撤退したのは、719（開元七）年のことだった。上述したように、碎葉はそれ以前から突騎施の勢力圏であり、唐の軍団は両属状態にありながら駐屯しているに過ぎなかった。しかし、唐が派遣した十姓可汗の阿史那献が、当時の突騎施の可汗であった蘇禄に717（開元五）年に敗れたことによって、両属状態も完全に破綻し、唐は719年に安西四鎮から碎葉鎮を除外し、代わりに焉耆鎮を加えることで碎葉を名実ともに放棄した。

その後、蘇禄が738（開元二十六）年に殺害されると、碎葉は蘇禄を殺害した莫賀達干（バガニタルカン）率いる黄姓突騎施と、都摩度（あるいは都摩支）及び彼が擁立した蘇禄の息子の吐火仙などが率いる黒姓突騎施の争乱の舞台となった[27]。唐は当初、莫賀達干を支援し、安西都護の蓋嘉運を派遣して、739（開元二十七）年に吐火仙等を碎葉城で捕縛する勝利を収めた。しかし、欲を出した唐は、旧西突厥王族の阿史那昕を送り込んで莫賀達干から主導権を奪い返そうとしたため、莫賀達干と断絶することとなり、742（天宝元）年には十姓可汗として送り込んだ阿史那昕が、莫賀達干によって碎葉の西南の倶蘭（クーラーン）城で殺害されてしまった。そこで、唐は翌年743（天宝二）年から黒姓突騎施を支援することに切り替え、吐火仙を擁立した都摩度を十姓可汗に冊立する一方、744（天宝三）年に河西節度使の夫蒙霊詧を送り込んで莫賀達干を殺害した。

その後も、黒姓・黄姓両突騎施の抗争は継続し、唐は749（天宝八）年、753（天宝十二）年にも黒姓可汗を冊立して、黒姓に支援を行っている。この唐の黒姓支援が、黄姓に連なる石国が唐から離反してイスラーム勢力に接近する原因となり、751（天宝十）年に、有名なタラス河畔の戦いを招くことになるのである[28]。

そこで、タラス河畔の戦いで捕虜になった杜環の

『経行記』逸文に現れる、砕葉城の記述を紹介したい。杜環は経歴不明の人物ではあるが、『通典』を編纂した杜佑の族人だったため、タラス河畔で捕虜になってから宝応初年（762年頃）に海路で帰国するまでの記録、『経行記』の一部が『通典』に採録される形で後世に残った。彼自身の経験談であるため、その記録は極めて貴重である。

『通典』巻一九三「辺防九 西戎五 石国条所引 杜環『経行記』」（p. 5275）
又有碎葉城。天寶七年、北庭節度使王正見薄伐、城壁摧毀、邑居零落。昔交河公主所居止之處、建大雲寺、猶存。
【和訳】さらに砕葉城がある。天宝七（748）年に北庭節度使の王正見が討伐を行った際、城壁が破壊され、集落は凋落した。かつて交河公主が留置されていた所には、大雲寺が建てられており、現存している。

まず、748年の砕葉攻撃の記述があるが、これを敢行した王正見については、ほかに史料がないため何者か明らかではない。この時に破壊された城壁として、柿沼［2019, p. 52］は、王方翼が建設した第２シャフリスタンであると指摘しており、その根拠として、本史料に現れる大雲寺が690（載初元）年十月以後に建てられ、第２シャフリスタン内に遺構が確認できることを指摘している。この点、考古学的な検討を行った上述の城倉［2021, p. 25］と軌を一にする。そこにいたとされる「交河公主」とは、722（開元十）年に唐から突騎施の蘇禄に嫁いだ女性である。その居地が砕葉城にあったとこの史料は述べているのである。

この記述に関して、内藤［1988, p. 16］は、蘇禄の時代から交河公主が砕葉城にいたことを示すと指摘する。一方、柿沼［2019, pp. 52-53］は、杜環『経行記』の「交河公主の居止せらるる所の處」とある記述の「居止」という表現が、半強制的に留置されたという意味合いが強いことから、交河公主は蘇禄殺害後に都摩度に擁立された時期か、739年に長安に連行される直前に砕葉城に「居止」されていた可能性をあげる。しかしながら、「居止」という表現を使ったのは、交河公主が砕葉を去った10年以上後に、当地を偶然訪れただけの杜環である。それゆえ、杜環の記録が現実を正確に反映したものかどうか心許なく、この記述だけで、交河公主が砕葉城に居住していた時期の決定という大問題に答えを出すことはできないだろう。本稿では従来通り、内藤説に与しておきたい。ただし、「居止」の意味合いに関しては傾聴に値するものであるため、柿沼説に基づいて「居止」は「留置」と訳している。突騎施と敵対する時代に砕葉を訪れた漢人の杜環の目には、唐から突騎施へ出嫁した交河公主は、実態は別として、留置されていたように見えたのではなかろうか。

この王正見の城壁破壊に関して、柿沼［2019, p. 52］はアクベシム遺跡の第１シャフリスタンではなく、第２シャフリスタンのみであると指摘していて、現状ではこれに従っておきたい。というのも、唐が安史の乱の混乱によって西域から完全に撤退した後の状況を、史料は以下のように記しているからである。

『新唐書』巻二一七下「回鶻伝下」（p. 6143）
至德後、葛邏祿寖盛、與回紇爭彊、徙十姓可汗故地、盡有碎葉・怛邏斯諸城。然限回紇、故朝會不能自達于朝。
【和訳】至德（756-757）の後、カルルクがますます強力となり、ウイグルと争いあった際に、十姓可汗の故地に移り、砕葉やタラスといった都市をみな保有した。しかし、ウイグルに隔てられ、それゆえ朝見しようとしても自力で朝廷まで到達することができなかったのである。

この史料から、８世紀後半期にカルルクが強勢となり、砕葉やタラスなどの「諸城」を支配したとある。「十姓可汗の故地」とは、チュー平野北方の山地のことを指していると見て間違いなく、その中で「砕葉城」を支配したと言っているのだから、砕葉の都市自体は存続していたのである。砕葉城は、第１シャフリスタンのみになりながら存続し続けたと考えられる。[29] ただし、20世紀まで第２シャフリスタンの城壁の大部分が残存していたのは事実なので、王正見が城壁のどの部分を破壊したのか、破壊後に再建されたのか、などの疑問は残ってしまう。今後の検討課題とせざるを得ない。

この後の砕葉がどうなったか、史料からははっきり分からない。そこで視野を少し広げ、セミレチエあるいはタラス地方について言えば、近年のカラバルガスン碑文とコータン文書との研究[30]によって、お

ぼろげながら歴史状況が明らかになってきた。それらの研究成果によれば、突厥第二可汗国を倒してモンゴル高原を統一したウイグル可汗国が、中央アジアをめぐる吐蕃・カルルク同盟軍との争いに勝利した後、802年以降にカルルクを支配下に置き、突騎施の黒姓可汗を再設置し、そして、その結果として、セミレチエからオルホンのオルド・バリク（現カラバルガスン遺跡）にあったウイグル王宮まで駅伝が開通したという［吉田 2011, 18–19；吉田 2019, pp. 45–47］。さらには、ウイグルの支配地域は、タラス地方までも含む可能性があるともされている［吉田／森安 2019, pp. 42-43］。タラスがウイグルの支配下に入ったならば、近接する碎葉城もウイグルの支配下に入った可能性が出てくるだろう。吉田［2018, pp. 161–164］が解読したセミレチエ発現のコインの銘文に、ウイグル王族であるヤグラカル氏が発行したと記されていたことも、その傍証となる可能性がある。アクベシム遺跡の考古学的時代区分では、突騎施の後にカルルクの時代があり（756–940 年）、その後にカラハン朝の時代が来るとされている［肯加哈買提 2017, p. 11］が、あるいは 9 世紀初頭にウイグルの時代も想定すべきなのかもしれない。ウイグル可汗国は 840 年に崩壊するため、彼らがいつまでセミレチエ方面に影響をおよぼすことができたのか、明らかではない。

その後、10世紀のペルシャ語地理書である『世界境域志』には、「SŪYĀB 20000 人（の兵士）が送られてくる大きな村落」［『世界境域志』17.2; Minorsky 1937, p. 99］という記述がある。SŪYĀB とはスイアブ、すなわち碎葉のことなので、碎葉城について記されているかのようである。しかし、ミノルスキー［Minorsky 1937, p. 303］は、12世紀に書かれたガルディージー Gardīzī の歴史書に、チュー河右岸にスイアブがあると記されていることから、チュー河左岸にあるはずの碎葉城とは合わないと指摘し、『世界境域志』のスイアブもまた、チュー平野の都市ではあるが、碎葉ではないとしている。

最後に碎葉城という名が見られるのは、1219年から1227年まで、チンギス・カンの中央アジア遠征に従った耶律楚材の『西遊録』の記録においてである。

『漢西域圖考』巻一「附論」所引『西遊録』（十八葉左）
索虜城在大河南。城已圮。唐碎葉鎮城古墟也。
【和訳】索虜城は大河（＝チュー河）の南方にある。城郭は既に崩れている。唐代の碎葉鎮城の廃墟である。

この記述は、宮内庁図書寮が所蔵する完本の『西遊録』には見えず、1870（同治九）年に刊行された、李光廷の『漢西域図考』にのみ採録されている逸文である。この記述では、碎葉鎮城は索虜城と呼ばれていたという。現在の遺跡の位置から見て、チュー河の南という位置関係は正しく、碎葉鎮城とはアクベシムのことであると見なせよう［cf. 内藤 1988, p. 9］。この13世紀前半の段階では、アクベシムは確実に廃墟となっていたようである。

おわりに

本稿では、史料に見える碎葉城の記述を拾い集めて紹介した。その結果として、遊牧民とオアシス民との関係、王方翼による築城の際の政治状況、唐朝統治下における碎葉城が持っていた国際関係上の意義、唐朝が西域支配の際に行っていた二重支配体制が碎葉でも行われていた可能性、突騎施の烏質勒統治下で両属状態にありながら、唐の軍団が駐屯していたこと、8 世紀半ばの城郭破壊は第 2 シャフリスタンのみに留まっていた可能性が高いこと、などを指摘した。また、9 世紀にはウイグル可汗国の影響がこの地域に及んでいた可能性があることも指摘し、注意喚起を行った。

本稿で取り上げた史料は、もちろんすべてではないが、齊藤［2021］と合わせることで重要なものはだいたい網羅できた。碎葉とその周辺の歴史については、出土文書や出土石刻史料に断片的に現れるものは省いているとはいえ、史料が豊富にあるとは言いがたい。それゆえに、考古学的な調査の進展は重要であり、今後も注視していきたい。

註

1）本稿では、「碎葉」と呼称した場合歴史上の地名を指し、「アクベシム」と呼称した場合、現代の遺跡を指すこととする。また、「碎葉」と表記する場合、周辺地域を含む、ある程度広域の地理空間を想定し、「碎葉城」と表記する場合、都市そのものを指すこととする。

2）齊藤［2016］ならびにその増補英訳版である Saito［2017］と、両者に基づき、さらに増補修正を加えた齊藤［2021］を指す。本稿で、単に「前稿」と言う場合、これらを指すこととする。煩雑となるため、書誌情報を挙げる際は

齊藤［2021］のみを挙げる。

3）トゥルファンオアシスの高昌王国と西突厥の関係について、荒川［2015, 第Ⅰ部］がトゥルファン出土文書を用いて詳細に検討しており、参考になる。

4）「米国城」については吉田［2002］を参照のこと。

5）アクベシム遺跡以外のチュー平野の遺跡については、望月［2022］を参照のこと。

6）山内［2022, p. 193］も遺跡の分布の検討から、遊牧民は山麓から山間部で、定住民はチュー川南岸の河岸段丘上に都市を建築して、それぞれ異なる生活圏を持っていたと指摘している。

7）本章の内容は前稿で詳しく論じている。先行研究の情報などはそちらをご参照いただきたい。

8）西突厥は阿史那賀魯の乱の鎮圧によって可汗の継承が途絶え、滅亡するとされているため、その後の西突厥系勢力は「旧西突厥」と呼称する。とはいえ、8世紀にわたって力を持ち続ける突騎施を含め、天山地域で力を持ち続けるトルコ系遊牧民の多くは西突厥由来の勢力であり、滅亡したとはいえ、旧西突厥の活動は活発であり続けるため注意が必要である。

9）ここまで、『旧唐書』巻八四「裴行俭伝」によった。ササン朝の亡命政権の顛末は前嶋［pp. 50-58］を参照のこと。

10）Лубо-Лесниченко［2002, p. 122］・加藤［1997, p. 150］・周偉洲［2007, p. 38］。このほか、王方翼の建てた碑文であるとする説［薛宗正 2010, p. 139］や、762（宝応元）年以後に建てられたものとする説［肯加哈買提 2017, pp. 196-197］がある。

11）本碑文は加藤［1997, p. 190］・周偉洲［2000, p. 312］に現物の写真が載るほか、Лубо-Лесниченко［2002, pp. 120-121］が現物と拓本の写真を掲載している。録文は諸氏がそれぞれ作成している。

12）福永は「隅」肯加哈買提は「小邦」を欠字に補う。

13）周偉洲［2000, p. 307］は「涂」、Лубо-Лесниченко［2002, p. 122］は「癸」に作る。とりあえずは、福永［加藤 1997, p. 190］・肯加哈買提［2017, p. 189］に従い、「祭」と読んでおく。

14）周偉洲［2000, p. 307］は欠字としており、福永［加藤 1997, p. 190］は「二」で読むが、Лубо-Лесниченко［2002, p. 121］が示唆するように、「三辺」は中国周辺地域を指す定型表現であるため、「三」とする。

15）柿沼［2019, pp. 51-52］は、「四面十二門」は誇張ではないかと推測する。断定はできないものの、筆者もその可能性が高いと考えている。

16）張広達［2008, pp. 149-150］の指摘を参照のこと。具体的には、クチャ王国の二重支配体制については荒川［1997］、コータン王国については森安［2015, pp. 191-201］・Zhang / Rong［1987, pp. 90-91］・張広達／栄新江［2008］・吉田［2006, pp. 147-148］がある。

17）高宗が死去したのは683（永淳二）年であるが、この乾陵蕃臣像が作られたのは705（神龍元）年前後であり、その像の中には、高宗死去以前に死亡した者や、高宗死後に冊封された者も含まれている［陳国燦 1980, pp. 189-190］。そのため、碎葉国／州が705年前後に存在したとは断言できないものの、少なくとも唐支配期に碎葉州が置かれたことがあったのは間違いない。なお、内藤［1988, pp. 17-20］は、スミルノヴァ氏の銘文読解に従って突騎施（テュルギシュ）コインを分析し、突騎施支配下の7世紀末から8世紀前半における碎葉に、ソグド領主が存在していたことを指摘するが、現在、スミルノヴァ氏の読解は支持されていない［吉田 2018, pp. 156-160；吉田 2021, pp. 100-101］ため、それに依拠する内藤説もここでは取り上げない。

18）調査の際にはスラブ大学のヴァシリー・ウラジミロビッチ Василий Владимирович 氏にご厚情を賜ったほか、同行した龍谷大学の岩井俊平氏、元・大阪府文化財保護課技師の枡本哲氏には調査に多大なご協力を賜った。この場を借りて諸氏に感謝申し上げたい。

19）先行研究の結果を踏まえた以前の録文については、齊藤［2021, p. 76］を参照のこと。

20）「存□（脊）属」の3文字は、以前の録文では「□□□使」とされていたが、実見すると3文字分のスペースしかなく、「使」とされていた文字は明らかに「属」が正しい。

21）「法界蒼生」の4文字は、以前の録文では「法界□□生」とされていたが、実見すると「蒼」の下半分が見えており、「界」と「蒼」の間には文字が入るほどのスペースがないことが判明した。筆者は実見前から意味上、「蒼」ないし「衆」が入ると予想していた［齊藤 2021, p. 80, n. 29］が、その予想が的中することとなった。

22）この吐蕃と唐との安西四鎮の争奪戦については、齊藤［2021］でも触れた。史料や先行研究についてはそちらをご参照いただきたい。

23）この単語は、古代トルコ語で「言葉」を意味する「sav」に、「～の人」を意味する接尾辞の「+či」が付加されたものである。柿沼［2020, p. 142］は savci と表記するが、より一般的に用いられている古代トルコ語表記に改めた。

24）9世紀後半期の事例ではあるが、齊藤［2014］は陰山山脈南麓にあった天徳軍が外交の窓口になっていたことを指摘している。

25）その他の版本については呉玉貴［2009, p. 860］を参照のこと。

26）王小甫［1992, pp. 285-286］は、金山道行軍総管を北庭都護府の前身と見なし、郭元振が金山道行軍総管として碎葉鎮の兵を従えたことが、北庭都護府に碎葉鎮が所属する理由であると指摘している。

27）両者の争乱は前嶋［1982, pp. 81-97］に詳しい。本稿は主にそれに拠っている。

28）前嶋［1982, p. 95］による。ただし、筆者はタラス河畔の戦いを直接引き起こした高仙芝の遠征自体は全く別の目的で行われたと考えており、現在別稿を準備中であ

る。

29）畢波［2007, p. 28］も砕葉城は破壊されていないという認識を示しているが、第１シャフリスタンと第２シャフリスタンの一方だけが破壊された可能性は考慮していない。８世紀後半以降も第１シャフリスタンが存続したことについては、第１シャフリスタンの中央街区で採取された出土木炭のうち、最も新しい伐採年代として10世紀末から11世紀初頭という炭素年代測定結果が出ている［中村 2016, pp. 56-58］こととも軌を一にする。

30）吉田［2006］・Yoshida［2009］・吉田［2019］・吉田／森安［2019］・Yoshida［2020］、ならびにそこで挙げられている参考文献参照。

参考文献

『旧唐書』／『新唐書』／『通典』／『資治通鑑』（旧版）＝中華書局標点本

『大唐西域記』＝京都帝大校訂本　『唐大詔令集』＝商務印書館排印本

『漢西域図考』＝広文書局影印本

荒川　正晴　1997:「クチャ出土『孔目司文書』攷」『古代文化』49-3，pp. 1-18.

ヴェシエール，E.／影山悦子（訳）　2019：『ソグド商人の歴史』岩波書店.

柿沼　陽平　2019：「唐代砕葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』18, pp. 43-59.

柿沼　陽平　2020：「文物としての随身魚符と随身亀符」『帝京大学文化財研究所報告』19, pp. 127-147.

加藤　九祚　1997：「セミレチエの仏教遺跡」『中央アジア北部の仏教遺跡の研究（シルクロード学研究 Vol. 4)』，pp. 121-184.

ケンジェアフメト，N.　2009：「スヤブ考古――唐代東西文化交流――」窪田順平他，（編）『イリ河歴史地理論集――ユーラシア深奥部からの眺め――』松香堂，pp. 217-301

齊藤　茂雄　2014:「唐後半期における陰山と天徳軍――敦煌発現「駅程記断簡」（羽〇三二）文書の検討を通じて――」『関西大学東西学術研究所紀要』47，pp. 71-99.

齊藤　茂雄　2016：「砕葉とアク・ベシム――７世紀から８世紀における天山西部の歴史的展開――」独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター（編集・発行）『キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究　アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡――2011～2014年度――』，pp. 81-92.

齊藤　茂雄　2021：「砕葉とアクベシム――７世紀から８世紀前半における天山西部の歴史展開――（増訂版）」『帝京大学文化財研究所研究報告』20, pp. 69-83.

城倉　正祥　2021：『唐代都城の空間構造とその展開』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所.

城倉　正祥／山藤　正敏／ナワビ　矢麻／伝田　郁夫／山内　和也／バキット　アマンバエヴァ　2017：「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015年秋期）調査出土遺物の研究――土器・塼・杜懐宝碑編――」『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌』5, pp. 145-175.

帝京大学文化財研究所（編）　2020:『アク・ベシム（スイヤブ）2019』帝京大学文化財研究所／キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所.

内藤みどり　1988：『西突厥史の研究』早稲田大学出版部.

内藤みどり　1997：「アクベシム発見の杜懐宝碑について」『中央アジア北部の仏教遺跡の研究（シルクロード学研究 Vol. 4)』，pp. 151-184.

中村　俊夫　2016：「出土木炭の放射性炭素年代」独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター（編集・発行）『キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究　アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡――2011～2014年度――』，pp. 56-59.

洪　性珉　2013：「税役から見た宋遼両属民」『内陸アジア史研究』28, pp. 1-28.

前島　信次　1982：『民族・戦争――東西文化交流の諸相――』誠文堂新光社.

松田　壽男　1970:『古代天山の歴史地理学的研究（増補版)』早稲田大学出版部.

望月　秀和　2022：「アク・ベシム遺跡の周辺遺跡の調査」山内和也／バキット・アマンバエヴァ（責任編集）『アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017』（帝京大学シルクロード学術調査団調査研究報告１）帝京大学文化財研究所，pp. 218-235.

望月　秀和／山内　和也／バキット アマンバエヴァ　2020：「空中写真によるアク・ベシム遺跡（スイヤブ）の解析」『帝京大学文化財研究所研究報告』19, pp. 61-126.

森安　孝夫　2015：『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版社.

森安　孝夫／吉田　豊　2019：「カラバルガスン碑文漢文版の新校訂と訳注」『内陸アジア言語の研究』34, pp. 1-59, +1 pl.

山内　和也　2022：「おわりに」山内和也／バキット・アマンバエヴァ（責任編集）『アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017』（帝京大学シルクロード学術調査団調査研究報告１）帝京大学文化財研究所，pp. 193-201.

吉田　豊　2002：「米国問題再訪」『神戸市外国語大学外国学研究』51, pp. 163-166.

吉田　豊　2006：『コータン出土 8-9 世紀のコータン語世俗文書に関する覚え書き』神戸市外国語大学外国学研究所.

吉田　豊　2011：「ソグド人と古代のチュルク族との関係に関する三つの覚え書き」『京都大学文学部研究紀要』50, pp. 1-41.

吉田　豊　2018：「貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配」『京都大学文学部研究紀要』57, pp. 155-182.

吉田　豊　2019：「カラバルガスン碑文に見えるウイグルと

大食の関係」『西南アジア研究』89, pp. 34-57.
吉田　豊　2021：「補説：クズラソフ Kyzlasov が発掘したコインの年代と歴史的背景に関するクローソン Clauson の解釈の問題点とコインに関する研究のその後の展開」『帝京大学文化財研究所研究報告』20, pp. 99-102.
吉田　豊／荒川　正晴　2009:「ソグド人の商業（四世紀初）」歴史学研究会（編）『世界史史料３――東アジア・内陸アジア・東南アジアⅠ』岩波書店，pp. 342-345.
畢　波　2007：「怛羅斯之戦和天威健児赴碎葉」『歴史研究』2007-2，pp. 15-31.
陳　国燦　1980:「唐乾陵石人像及其銜名的研究」『文物集刊』2, pp. 189-203.
肯加哈買提，努尔蘭　2017：『碎葉』上海古籍出版社.
劉　子凡　2016：『瀚海天山――唐代伊・西・庭三州軍政体制研究――』中西書局.
王　小甫　1992：『唐・吐蕃・大食政治関係史』北京大学出版社.
呉　玉貴　2009：『突厥第二汗国漢文史料編年輯考』中華書局.
薛　宗正　2010：『北庭歴史文化研究――伊・西・庭三州及唐属西突厥左廂部落』上海古籍出版社.
張　広達　2008：「唐滅高昌国後的西州形勢」『文書・典籍与西域史地』広西師範大学出版社，pp. 114-152.
張　広達／栄　新江　2008：『于闐史叢稿（増訂本)』中国人民大学出版社.
周　偉洲　2000：「吉爾吉斯斯坦阿克別希姆遺址出土唐杜懐寶造像題銘考」『唐研究』6，pp. 383-394.
Biran, M.　2005: *The empire of the Qara Khitai in Eurasian history: between China and the Islamic world,* Cambridge.
de la Vaissière, É.　2010: Note sur chronologie du voyage de Xuanzang. *Journal Asiatique* 298-1, pp. 157-168.
Лубо-Лесниченко, Е. И.　2002: Сведения китайских письменных источников о Суябе (городище Ак-Бешим). In: *Суяб: Ак-Бешим*, Санкт-Петербург, pp. 115-127.
Mackerras, C.　1990: The Uighurs. Sinor, D. (ed.) *The Cambridge History of Early Inner Asia*, Cambridge, pp. 317-342.
Minorsky, V.　1937: *Ḥudūd al-'Ālam. 'The Regions of the World': A Persian Geography 372 A. H. — 982 A. D.* London.
Saito, S.　2017: Suiye (碎葉) and Ak-Beshim: a Historical Development at the Western Tien-shan in the 7th to the First Half of the 8th Century. In: Kazuya Yamauchi, Bakit Amambaeva, et al. (eds.) *Protection and Research on Cultural Heritage in the Chuy Valley, the Kyrgyz Republic: Ak-Beshim and Ken Bulun.* Tokyo, pp. 91-107.
Yoshida, Y.　2009: The Karabalgasun Inscription and the Khotanese Documents. In: Durkin-Meisterernst, D. et al. (eds.), *Literarische Stoffe und ihre Gestaltung in mitteliranischer Zeit: Kolloquium anlässlich des 70. Geburtstages von Werner Sundermann*, Wiesbaden, pp. 349-362.
Yoshida, Y.　2020: Studies of the Karabalgasun Inscription: Edition of the Sogdian Version. *Modern Asian Studies Review* 11, pp. 1-139.
Zhang, Guanda / Rong, Xinjiang　1987: Sur un manuscrit chinois découvert à Cira près de Khotan. *Cahiers d'Extrême-Asie, Revue de l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 3, pp. 77-92.